

## 見性院住職からの一言（その四 いままた檀家制を考えてみる）

檀家制の将来を占うことは寺院社会の行く末を予測するもので両者は直結しており、また一蓮托生の関係にあることは間違いありません。たとえ大本山や観光、祈禱寺院が檀家制衰退、あるいは崩壊に直に影響を受けないことがあっても、日本の寺院の大多数は当然、檀家によって成り立っています。そのため日本の伝統仏教界が大打撃を被ることは自明の理です。そのためこれから私たち仏教者は何をしていかなければならないのか。どこに向かって歩を進めていけばよいのか。転換的岐路に立たされている中で10年後の寺院のあるべき姿を見据えて動きださなければならない時です。今日までの日本仏教の発展は檀家制を礎にしてきたために護持できたのであり、私自身は一概にこれを全否定するつもりは毛頭ありません。

しかしながら、急激な時代の変化に翻弄されるままに時代に流されることは決して得策ではありません。変化には時に柔軟に対応しながらも守るべきものは守り、変えてはいけない僧侶としての矜持（きょうじ）は保つことが重要です。大衆迎合主義は危険であり、我こそは時代を牽引し、新たな時代を切り開いていくんだという気概を僧侶ひとりひとりがもつことでこの難局を乗り越えてゆけるものと信じます。

いうなれば檀家制は全体主義、地域主義です。これがすべて悪であるということはもちろんありません。しかしながら、時代は多様化主義、個別（個人）主義に傾むいておりコミュニティー（運命共同社会）・家制度が崩壊しつつある昨今、村社会の核となってきたお寺や神社にかつてのような求心力はありません。

少々極論かもしれませんがわたしは一度、檀家との関係をご破算にして再出発をし、改めてその関係を再認識、再構築してみるのも一案かと思います。お互いに一度「群れない、慣れない、頼らない」を前提に見直してみる。その中で今まで通りの関係を続けるか、それとも別の選択肢を考えてもらうのも一案かと思います。暫くは微妙な緊張関係の続く時期（冷却期間）を経ることになりますがこれが将来、両者に幸運をもたらすことになります。私の場合、それが今ですが、逆に居心地はよく檀家はむずむずしています。そしてそんな中で新信徒は急増しており、入信は跡を絶ちません。

今ある檀信徒を後生大事にしてその枠の中で再構築を図ることも一案かと思いますが、長期的視点を見据えた場合はやはり心許無（こころもとな）いと思われれます。檀家制度が大きな岐路を迎えた今、あなたならどんな手を打ちますか。腹をくくりますか。それとも。